

22.7.10

# 定期接種 ワクチンギャップ どうする

## 世界に遅れ

ワクチンは過去200年余り、上水道整備と並んで感染症の予防に貢献してきた。日本はほかの先進国に比べ、無料で受けられる定期接種ワクチンの種類が少なく、接種率も低い。4月下旬に盛岡市で開かれた日本小児科学会で、そんな世界と日本との「ワクチンギャップ」をテーマにしたシンポジウムがあった。

### 小児科学会がシンポ



日本小児科学会のシンポジウムで発言する中野貴司さん(右) = 4月25日、盛岡市民文化ホール

#### 政策後退

冒頭、座長を務める帝京大溝口病院の渡辺博教授が、かつては先進国の中で定期接種ワクチンの種類が多い方だった日本で、ワクチン政策が後退した経緯を説明した。

定期接種だったインフルエンザワクチンは1994年に任意接種になった。日本脳炎ワ

クチンについては5年前、副作用が問題となって厚生労働省が事実上の接種中止勧告を出した。

「その間、米国などではB型肝炎、水痘といったワクチンが定期化された。その後も子宮頸がんワクチンなどが定期接種になってい

る」  
これを受け、まず日本脳炎ワクチンの現状を高知大の前田明彦講師が報告。主に3、4歳児に対する新しいワクチンの接種が今年4月から始まったものの、この間、未接種だ

った子どもへの追加接種はワクチンが不足しているため見送られた。

#### 広がる懸念

前田さんは未接種の子どもが日本脳炎にかかった事例を紹介し「日本は日本脳炎ウイルスのまん延地域であることを忘れてはならない」と指摘、追加接種など積極的対策が必要だと訴えた。

続いて国立病院機構三重病院の小児科医、中野貴司さんが、10代や20代の若者で百日ぜきの患者が増加傾向に

#### 日本と欧米の定期接種

※2010年2月現在。V.P.Dを知って子どもを守ろうの会のウェブサイトで

定期接種 任意接種 未導入	日本	米国	英国	ドイツ	フランス
B型肝炎	△	○	△	○	○
ヒブ感染症	△	○	○	○	○
小児肺炎球菌感染症	△	○	○	○	○
ジフテリア	○	○	○	○	○
百日ぜき	○	○	○	○	○
破傷風	○	○	○	○	○
結核	○	×	○	△	○
ポリオ	○	○	○	○	○
はしか	○	○	○	○	○
風疹	○	○	○	○	○
おたふくかぜ	△	○	○	○	○
水痘	△	○	△	△	○
子宮頸がん	△	○	○	○	○

あると説明した。欧米では乳児期のD.P.Tワクチン(ジフテリア、百日ぜき、破傷風の3種混合)接種に加え、年長児に「Tdap」というワクチンを追加接種する国が多いという。

中野さんは、D.P.Tワクチンの量を減らし、年長児での百日ぜき予防に使える可能性がある、という国内での研究結果を報告し、「世界に追いつけるようわたしたちも頑張りた」と述べた。

#### 意義を伝える

細矢光亮・福島県立

医大教授は、ポリオ(小児まひ)を予防する生ワクチンで約440万人に1人の割合で神経まひを起こす患者が出ることから、先進国ではその心配がない不活化ワクチンに移行しつつあると語った。  
「日本で不活化ワクチンが出てくるのは2012年末か13年春。それまでは生ワクチン接種の維持が必要だ」  
福島県小児科医学会予防接種委員会の委員長で開業医の橋本剛太郎さんは、自治体と協力してワクチンの接種率アップを実現した経験を発表した。

ワクチンの種類と年齢別に、接種済みの方の割合を市や町から報告してもらい、一覽表を作成。それを見せられた市や町の担当者は未接種の人に個別に連絡を取って接種を勧めるようになり、接種率が上がったという。  
「(はしかと風疹を予防する)MRワクチンの対象となる中学生や高校生には、学校の先生から接種の意義を伝えてもらう。自ら受けに行くという体験をさせることも非常に大事だと思う」と橋本さんは話していた。